

特110

751

法文本日代
考備授教

纂編所輯編館成開

版藏館成開京東



始



特110

751

開成館編輯所編纂

現代日本文法教授備考

大正

12. 1. 25

内交

株式 會社 東京開成館藏版

現代日本文法教授備考

目 次

上 卷

品 詞

第一章	總 說	一
第二章	名 詞	三
第三章	代名詞	九
第四章	副 詞	二
目 次		一

目 次

二

第五章	接續詞	一九
第六章	感動詞	二四
第七章	動 詞	二七
第八章	形容詞附形容動詞	五二
第九章	助動詞	五九
第十章	助 詞	七〇
品 詞		
第一章	動詞の性質上の分類	七一
第二章	敬讓の動詞	七四
第三章	文語助動詞の用法	七五
第四章	口語助動詞の用法	八一
第五章	文語助詞の用法	八四
第六章	口詞助詞の用法	九一
第七章	紛れ易い品詞	九二
第八章	單語の構成	九六
第九章	品詞の轉換	一〇四
文 章		
第一章	文及び文の成分	一〇八
目 次		三

目 次	四
第二章 節	一一二
第三章 文の成分の倒置及び省略	一一三
第四章 文の組織上の種類	一一五

現代日本文法教授備考

上 卷

品 詞

第一章 總 説

(の本現數上
頁文代字欄
數法日はの)

一 文語と口語 本書では、記録用の言語を文語とし、對話用の言語を口語としたのであるが、更に委しく見ると、記録用の言語の中には、主として中古語の語法に従ふものと、現代の口語の彫琢されたものとの二種がある。しかし、單に文語・口語

上卷 品詞 第一章 總 説

一

といふ場合の區別は、中古語の語法に従ふのを文語とし、記録用のものでも、口語の彌琢されたものは、やはり普通は口語と稱してゐる。そして、本書は學理的よりも學習者の便宜を圖つて編纂したのであるから、この兩者の區別も便宜上普通の見解に従ふこととした。

二 文法 文語の法則を文法といひ、口語の法則を語法と稱して、二者を區別する人もあるが、本書は從來の慣例に従つて、いづれも文法と稱したのである。

文法の種類は、敘述的文法と説明的文法とに二分し、更に、説明的文法を歴史的文法・比較的文法・一般的文法に三分する說もあるが、本書はもとより敘述的の文法でまた實用的のものである。(龜田次郎氏著國語學概論參照)

二 單語と品詞 單語は文法上言語の單位として取扱はれるものであると說いた。従つて助動詞や助詞のやうに附屬的のものでも、我が國文法上言語の單位として

取扱はれるものであるから、これを單語としたのである。

單語を九品詞に分類したが、その分類は意義・職掌・形式の三方面を標準としたのである。

本書は總説に於て九品詞の大體を知らせ、直ちに本論を説明することとし、從來の他の文法教科書のやうに、一度九品詞を説明し、更にこれが活用を説明するやうな迂遠な方法を避けた。

第二章 名 詞

五

名詞の分類 英文法では名詞を固有名詞・普通名詞・集合名詞・物質名詞・抽象名詞の五つに分類するが、我が國語の名詞には、冠詞もなく、また述語に及ぼす數の影響もないから、名詞を分類する必要を認めない。本書に於ける固有名詞と

通名詞も、單にかやうな分類法のあることを知らせるために附け加へたのに過ぎない。

名詞の性・數・格 此等も我が國語では全く説明の必要がないが、英文法と比較する場合の参考までに説明しよう。

性を區別する名詞
性を區別する名詞
めうし(牡牛) めんどうり(雌鳥)

複數の名詞

一、疊語	人々	國々	山々	家々
二、接頭語	諸手	諸大名	多年	衆人
三、接尾語	親達	下部等	女中ども	紙等

右の三つの場合があるが、本書では、疊語・接頭語・接尾語は、下巻の「單語構成」

の章で説明することとした。

格を示すには、我が國語は凡べて助詞を使用するから、助詞の用法の時に説明したよりよからう。

名詞の敬語法 名詞の敬語法については、チャンバーレン(Chamberlain)氏も論じてゐるやうに、我が國語の特色であるから、多少説明するがよいと思ふ。

一、接頭語	おほ君	み位	おん姿	おほみ代	おみおつけ
二、接尾語	少佐殿	公方様	母君	父上	弟御
	山田君	師團長閣下			

此等はいづれも尊敬の意を添へるものであるが、自己を謙^{ヘリクダ}る場合には、愚父・拙宅・微意・弊家などのやうに、字音の接頭語を使用する。(吉岡郷甫氏著文語口語對照語法第三章第一節参照)

五

名詞と數詞。數詞は、職掌の上から見ると、多少名詞と相違するところもあるが、意義や形態に於ては大體名詞と同様であるから、本書では特に數詞の項目を立てないこととした。

米一石 金拾圓 木綿三丈

右の石・圓・丈などは、これを名詞と稱する人もあるが、此等は獨立した名詞として説明しがたい點もあらう。従つて、本書では、此等は一種の接尾語のやうなものと見て、一石・拾圓・三丈をそれゞゝ一つの名詞として取扱つた。

六

練習（練習問題の中で、漢語は名詞であることを説明して頂きたい）
次の文から名詞を摘出せよ。（——は名詞）

一、春をかざるものは、第一に花なり、天地美裝す。第二に鶯・歸雁・雲雀なり

自然の音樂をなす。第三に暖氣なり、寒からず、暑からず、心おのづから草本とともにゆるぶ。第四に霞なり、日光これに當りて景致やはらぎ、月影これに映じて夜色更に幽なり。（大町桂月「九十の春光」）

二、山野に花卉少からず候へども、香氣あるものは多からず候。しかも芬香あるものは藪澤の中にありとも、人のために認めらるべく候。これと同じく人もまた香氣あるものとならんことこそ願はしく候へ。（竹越與三郎「人の香」）

三、廣瀬海軍中佐の銅像成り、今日を以て除幕式を舉行せらる。思ふに、これ閉塞隊に對する江湖同情の致す所にして、精采奕々たるこの銅像は長へに當年の意氣を表示し、不言の教訓たるべきや必せり。平八郎（東郷）席末に列して感慨禁すること能はず、聊か一言を述べて式辭となす。

四、明治天皇の御製が二十萬首もありなさるといふことは、あらゆる點において、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事蹟の一つとして驚嘆し奉るより外はない。(芳賀矢一「玉の御聲」)

五、翠色の滴るやうな男山の頂には、石清水八幡の莊嚴な社殿があり、その麓を繞る一簇の竹林の蔭には寂れた町があり、橋本の渡しを渡ると、梅に躊躇に名高い長岡天満宮や、眼病に靈験のあるといふ柳谷觀音も遠くはない。およそ、この邊の風物は、古色と頽廢の氣とを帶びて、そぞろに遊子の心を痛ませるものがある。(成瀬無極「男山の南祭」)

〔注意〕 漢語の熟字はもとより名詞であるが、(五)の莊嚴なは形容動詞である。

第三章 代名詞

本書では、代名詞は極めて簡単に説明したが、場合によつては、自稱・他稱・對稱・不定稱及び近稱・中稱・遠稱などの名稱も附け加へて説明して頂きたい。

一〇 代名詞の定義 代名詞は、事物の名に代へて指示する單語であると定義すべきである。特に近稱・中稱・遠稱などの説明には、この「指示する」の語が必要である。

一一 代名詞の分類 人代名詞・指示代名詞の分類は、名詞の分類と同じく、語法上には何等の關係がない。従つて、本書では分類上の名稱を知らせるために附け加へたのに過ぎない。

一二 代名詞の數 代名詞も名詞と同じやうに、

一、疊語 われく たれく

- 二、接頭語 諸君
三、接尾語 君たち 諸子
君たち 僕ら
などの三種の場合がある。

一一 練習

次の文から名詞・代名詞を摘出せよ。（——は名詞、——は代名詞）

一、四十二の齢は重盛に於て決して短きものにあらずなりき。平家の興るや、彼實にその樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實にその柱石たり。彼の一生はその父入道とともに平家史の大半を語るものなりき。（高山樗牛「平重盛論」）
二、君と別れてはや幾旬、夢魂折々君を慕ひ君を追うて君が机上に落つ。君が客窓半夜の夢、またよく我を求め我を尋ねて、この秋色滿眼の故山に到る

ながらんか。

三、孔子は志を得ずして空しく經綸を抱いて咏嘆の間に死歿せり。ソクラテスとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架の上に仆れぬ。然れども、これらの人々の志す所は天下後世にありて、現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮する所にあらずなるなり。

（高山樗牛「世界の四聖」）

四、お手紙ありがたう。この土地ではあまり變つたこともありません。山本君は君のあとを追うて東京に行かうかといつてゐます。渡邊君は士官學校豫科にはひるつもりで、それまではこちらの中學校にあるといつてゐます。

五、人間は常に何等かの方針に隨つて生きてゐるものだ。意識がこの方針に隨

つて生活することを知つてゐない場合にも、その人の遺傳や境遇に培はれて、知らず識らずに働いてゐる一個の生活方針といふものがあるに相違ない。

六、好景氣の後には不景氣があり、不景氣が幾年か續けば、その後に好景氣が来るといふのが經濟の常則であつて、いかなるものもこの常則の動を止めることは出來ない。また、この常則が働けばこそ經濟上の現象は甚しい所まで行かないで、自ら調節されるのである。(堀江歸一「不景氣の襲來と我が國民生活」)

第四章 副詞

一四 副詞の用法 副詞の用法は本書に説明したやうに、

- 一、用言を修飾するもの
- 二、體言を修飾するもの
- 三、他の副詞を修飾するもの
- 四、語句を修飾するもの
- 五、文を修飾するもの

右の五種に分類して説明すべきである。

副詞の位置は、直接に被修飾語の上に、または、他の語を挿んで間接に被修飾語の上にある。

一四

時及び場所の副詞 時の副詞の中すでに・かつて・やがて・いまだ・しばし・しばしばなどは、何人もこれを副詞と稱するが、昨年・今日などの語は、これを副詞とする人もあり、名詞とする人もある。例へば、

- 一、昨年の今日は 日曜日なりき。
- 二、父は昨年なくなりました。

三、私は今歸つたばかりです。

右の中、(一)の例は勿論名詞であるが、(二)(三)の例は名詞と見る説と副詞と見る説との兩説がある。思ふに、此等の語は、現代文では、名詞としてよりも副詞として用ひられることが多いはあるまいか。從來(二)(三)の例のやうな場合には、いづれも名詞から轉來した副詞として説明したのであるが、現代では、通常は副詞として用ひられて、時には名詞としても用ひられることがあると説明する方が至當ではあるまいか。この考を根據として時の副詞を説くのが最も穩當であると思ふ。

場所の副詞の中、こゝに・そこになどは、一つの副詞とする説と二つの單語とする説とがある。しかし、此等は品詞論といふ分析的研究を主とする部門では二つの單語とし、文章論では一つの修飾語として取扱ふべきであると思ふ。

一四 形容詞の連用形から轉ずる副詞
この副詞についても、現今二つの説が行はれて居る。

一、 風涼しく吹く。

水清く流る。

帽子を軽く造る。

二、 風烈しく吹く。

水速く流る。

帽子を軽く打つ。

右の用例で、(一)(二)ともに形容詞の連用形と見る説もあるが、多くの文法書には、(一)は形容詞、(二)は副詞と説明してある。今、後者の説の理由を見ると、(一)は體言の有様を表すから形容詞、(二)は用言の有様を表すから副詞といふのであるが、若しこのやうな標準で兩者を分類すると、動詞にも同様の場合が生じて来る。

一 雪さえはつ。

衣をいそぎかふ。

- 一、山をすぎゆく。
本を読み終る。
- 二、木の葉あらそひ落つ。
書をくりかへし読む。

けれども、右の動詞の區別は、山田孝雄氏以外には、殆ど説明した人が無いやうに思ふ。若し形容詞に兩者の區別を立てれば、動詞にも兩者の區別を立てるのが至當である。しかし、果して明瞭に兩者の區別を立てることが出来るだらうか。今假に兩者の區別を立てることが出来るとしても、一度品詞論で兩者の區別を立てた以上は、文章論では如何に區別して取扱ふかといふことも考慮しなければならぬ。即ち「帽子を軽く作る」では、「軽い帽子を作る」といふ意味であるから形容詞、「帽子を軽く打つ」では、軽くは打つを修飾するから副詞であると説明した以上は、文章論でいづれも動詞を修飾するから修飾語（または副詞的修飾語）であると説明するのは、そこに多少の無理が生ずるであらう。こゝに於て、(一)(二)と

ちに副詞とすべきものであるとの説が起るかも知れないが、萬一かやうな説を認めれば、用言活用形の中の連用形の存在を認めないこととなる。換言すれば、用言の連用形即ち副詞となつて、連用形の用法は中止形の用法ばかりとなるだらう。それでは、連用形といふ名稱も不必要となり、根本的に活用形の變更を論じなければならぬやうになる。しかし、中等教育では、勿論かやうな部分にまでも論究する必要はあるまいから、本書では、山田孝雄氏の説に従つて、(一)(二)ともに形容詞の連用形の一用法であるとし、(二)のやうな場合にも、形容詞の連用形は用言に連る形であるから、時には副詞的用法にも立つもので、連用形の用法の一種として説明し、副詞に轉じたものとはしないのである。(山田孝雄氏著日本文法論「形容詞の活用」参照)

一四 副詞の呼應　副詞の中には、單に語句や文を修飾するばかりでなく、進んで述

語に特別の用法を起させるものがある。例へば、

よも忘れじ。

多分お天氣だらう。

用意をさく怠らず。

豈他あらんや。

かやうな用法は、通常副詞の呼應と稱せられるもので、文を作る場合に特に必要な事柄であるから、場合によつては説明するがよからう。

一七 練習

次の文から副詞を摘出せよ

一、なるべく 親切に 周密に 静かに 意外に

二、しばく

三、つらく 果して 實に 蓋し 僅かに 決して (三宅雪嶺 「美術の保護

を論ず」)

四、實に 一體 自然に とりわけ もつとく (上野山清貢 「初夏の北海道」)

五、ちよろく 微かに ぢつと 極めて 一齊に 折々 却つて 一入 (内

山舜 「文章大觀」)

六、更に 決して 只 極めて 殆ど

第五章 接續詞

接續詞を教授する場合には、生徒はまだ單語の構成や品詞の轉換を知らないからこの點に注意して頂きたい。

接續詞と副詞の區別 接續詞も、職掌上から見ると、語句や文を接續するばかりでなく、下のものを修飾して副詞的に用ひられるから、往々副詞と混同し易

い。従つて、生徒に對しては次のやうな標準を示して説明すべきであらう。

かつ戦ひ、かつ走る。

雨がまた降りだした。雨ついで来る。

右のやうな場合には、單に下のものを修飾するだけであるから、副詞である。

書を読み、且字を習ふ。東京に行き、ついで日光に廻る。

山また山を越ゆ。

右のやうな場合には、他のものを修飾する點から見ると副詞のやうであるが、更に上下の語句を接續する役目をも持つてゐる。即ち副詞は單に下のものを修飾するだけであるが、接續詞は必ず上下の語句や文を接續する役目を有する點に注目して兩者の區別を立てるべきである。

接續詞の分類 この分類も語法上あまり必要はあるまいが、説明上の便宜とし

て、一般に用ひられてゐる分類法を述べよう。

一、事物を累加するもの

且 又 及び 並に………等 (文語)

さうして それに それから………等 (口語)

二、事物を選択するもの

或は 又は はた(將)………等 (文語)

それとも (口語)

三、因果關係の順態なもの

然らば さらば 隨つて 因りて……等 (文語)

それでは それだから そこで……等 (口語)

四、因果關係の逆態なもの

然れども されど さりながら 但し……等 (文語)
それでも それに ところが……等 (口語)

二 練習

次の文から副詞と接續詞とを摘出せよ。 (——副詞、 ——接續詞)

一、吾人は一の事物を處するにも、須らく究極の目的を指定せざるべからず。

然らざれば、徒にその中間の行路に躊躇して、遂に勞して効なきに終らんのみ。

二、米國大統領は軍備制限問題並に太平洋及び極東の問題を討議すべき會議を開催せんことを發議せり。

三、戦争の刺戟乃至教訓によりて勃興せし主張並に精神は、反軍國主義及び國

民自決の精神なりとす。

四、私は年末・年始または中元などの贈答を全く廢止せねばならぬとはいはぬ。

しかし、それが祝日や祭日を記念するといふからには、虚禮に立る點を戒めねばならぬと思ふ。ところが、どこまで禮儀で、どこから虚禮であるかとなると、これは一々の場合について決定するより外はないのである。だから、原則としては全然盆・節季の贈答を廢止するといふ主義を宣傳したいのである。(帆足理一郎「文化生活と人間改造」)

五、ふと、どこか下の方で水の音が聞え出した。で旅人はHといふ炭焼の村に近づいたことを知つた。朝の七時からその時刻まで、——その時刻といふのは午近く、或はもう少し廻つてゐるかも知れない。彼の腹はさう知らせてゐる。——雪の中をすほりくとこいで來た彼は、漸くほつと一息つい

た。(里見弾「峰越」)

六、ドイツの國家を見ると、フランスのそれとは反対である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であり、また理性的であつて、徒に感情に奔らない。隨つてその音樂も感情中心のフランスの音樂などとは大いに違つてゐる。(田邊尚雄「國歌と國民性」)

三 第六章 感動詞

感動詞の範圍 これについては、現今二つの説がある。

一、あな・あはれのやうに、主に他の語の上に用ひられるものを感動詞とする説

二、右の語の外に、更に、や・よ・かなのやうな、他の語の下に用ひられるも

のをも感動詞とする説

右の兩説の中、本書は第一の説を採用したのである。元來感動詞は感情や意志の動く時に發する音聲をうつすものである。従つて、その多くは「あゝかなし」、「いざ行かん」などのやうに、文の先駆として用ひられるものであるが、時には單獨に用ひられることがある。例へば、「野球の試合を見ましたか」と問はれて、「はい」と答へる時の返事は、確かに「私は野球を見ました」と同様の意義を有するものである。(勿論、文法上では文とはいへないが) かやうな用法は主に感動詞の場合に生ずる現象であつて、や・よ・かななどに於ては、決してこれを認めることが出来ない。且や・よ・かななどの助詞は、他の語に依存して漸くその意義を認められるもので、最初から感動の意義や意志の方角などを表してゐる語とは全く同一に論ずることは出來ないのである。

二六 練習

次の文から副詞・接續詞・感動詞を抽出せよ。(—副詞、—接續詞、—感動詞)

一、あはれめでたき今日の日や。

あはれ樂しき今日の日や。

いざもろともにうちつどひ、

君が八千代を歌はなん。(一高寮歌)

二、嗚呼、君を横濱の埠頭に迎へて、互に手を握りたらん時の我が歎やいかなるべき。

三、やよ、汝、思うても見よ。齡既に十五歳に達せしものにして、未だかゝることすら知らざるものいづこにかかる。

四、父親はどちらかといへば、武藝よりも學問のすきな質であつた。しかし、いろいろの事情があつて、好きな道には全く入ることが出来なかつた。

隨つて、僕が讀書でもすると、それを非常に喜ぶやうに見えた。四書や五經の素讀をとうに終へて、史記などを熱心に讀んでゐるのを見ては、「やあ、史記が讀めるか、なかくえらくなつたね。」などといつた。

五、ねえ、君がそのつもりなら、願つてもない幸ひだ。きつとそれを實行しよう。しかし、いざ實行するといふまでは、誰にも必ず洩らさないことにしようではないか。

六、あゝ、危いく、そら、そら、子供が熱湯の鍋へ這入る、火傷する、危いく、そら、そら。

二八 第七章 動詞

「あり」について 本書では、動詞は事物の動作・存在を表し、一定の語形變化

をなす單語であると説明した。動作を表すものを動詞とするは何人も理解し易いことであるが、有り・居り・侍りのやうに、存在觀念を表すものについては、多少疑はしい點もあらうから、左に吉岡郷甫氏の説を引用して説明しよう。

古來用言を二つに分けることはすべて一致して居りますが、「あり」の所屬につきましては、學者によつて區々であります。近頃の或學者などは、「存在言」といふ別の品詞を立てて、動詞から「あり」を離し、形容詞から「なし」を離して、これに屬させて居ります。しかし、單語の分類といふものは、たゞその意義にばかり偏してはなりません。同時に、形態・職能をも考へなければなりません。「あり」「なし」は、その意味から申しますれば、いかにも動詞でも形容詞でもなく、他の同類の語であります。形態・職能の上から申しますれば、「あり」は他の動詞と略々趣を同じくし、「なし」は同じく形容詞と同様であります。

すから、この二語のために特別の品詞を立てることをしないで、一は動詞に入れ一は形容詞に入れる取扱が、甚だ當を得たものであらうと思ふのであります。

(文語口語對照語法參照)

右の説明によると、「あり」と「なし」とは、意義の上から分類すると當然一品詞を立てるべきものであるが、形態の上から見ると、他の動詞や形容詞と同様であります。また職掌の上から見ても、いづれも主語に對して何等かを述べる役目を持つて居るものであるから、僅かな語數のものに對して一品詞を立てるよりも、類似點を以て、一は動詞に一は形容詞に屬させるのが穩當であるといふのである。もとより嚴密な意味からいへば一品詞を立てるのが分類の目的に適つたものであらうが、かくては益々文法を複雑にするばかりで、形式を重んじる文法の主意にも反すると思ふから、本書は從來の説に従つたのである。

●活用形の名稱　動詞の活用形の排列は勿論五十音圖を基礎としたものであるが、活用形の種類は動詞によつて一樣でない。例へば、奈行變格活用では、文語は「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」の六種、口語は「な・に・ぬ・ね」の四種である。また、四段活用では、文語・口語ともに四種である。しかし、動詞の運用はいかなる動詞も一樣であるから、最も活用形の種類の多い奈行變格活用に準じて、他の動詞にも六種の活用形を立てるのである。また、本書に於ける六種の活用形の名稱も、最も通俗のものを採用したのであるが、もとより便宜的のもので、あらゆる用法を意味するのではない。

●命令形について　命令形については現在二つの説が行はれてゐる。

- 一、「起きよ」「見よ」の全部を命令形とする説
- 二、右の中、「よ」は命令形から離して助詞とする説

本書は第一の説を採用した。もとより、平安朝では、

四段 御いのりもつかうまつれ。

文はよも見給はじ、詞にて申せよ。

（枕草子）
とくこといひやりたるに。

（兼輔集）
とくめぐりこよ、空のうきぐも。

（うつぼ物語）
（大和物語）
（枕草子）

右の例のやうに、「よ」の用法は現代よりも一層自由で、また活用形の一部でないことも明瞭である。この語法によつて現代文を見れば、「よ」は勿論活用形の一部とすることは出來ない。しかし、一方から考へると、かやうな語法によつて、かなり時代の隔つた現代文を十分に説明することが出来るだらうか。殊に口語の「見る」「來い」などの場合に、ろ・いを助詞とすれば、果して初學者に十分理解が出来るだらうか。前にも述べたやうに、本書は歴史的文法でなく、實用的文法で

あるから、強ひて舊説を墨守する必要もあるまいと思ふ。且時代語に於ける命令の「よ」の用法を見ると、命令形の一部としても何等の矛盾をも生じないのであるから、本書は現代文を根據として第一説を採用したのである。

三四
●●●●●
「用」の活用　國語調査委員會編纂の疑問假名遣を見ると、本居宣長・岡本保孝・井上文雄などのハ行上二段説、敷田年治のハ行上一段説、谷川士清・黒澤翁滿などのワ行上二段説、東條義門・萩原廣道・黒川春村などのワ行上一段説がある。この中、ワ行説は語源を「持居」とし、ハ行説は「持ち」に荒ぶ・萎ぶなどのやうに

ハ行音が添はつたものとするのである。しかし、實際の用例を見ると、平安朝はワ行上一段に活用し、近世に於てはハ行上二段に活用してゐるから、歴史的に論ずるとワ行上一段に従ふべきであるが、現代の文語文の立場から論ずるとハ行上二段説を採用するのが正當である。なほ一步進んで論すると、現代の口語ではハ行上一段に活用するから、歴史的に見てワ行を取り、現代の口語から見て上一段を取つて、ワ行上一段に統一した方がよいやうに考へられるから、本書ではワ行上一段として説明し、更に國定教科書の用法をも重んじて、ハ行二段説をも附加したのである。

四六
●●●●●
「おはす」の活用　この語の活用については、從來佐行變格として取扱はれたものであるが、その誤であることは、山田孝雄氏が「日本文法論」の中に説明してゐられるから、左にその要點だけを紹介しよう。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
佐 變	おはせ	おはし	おはす	おはする	おはすれ	おはせよ
四 段	おはさ	お・は・し	おはす	おはす	おはせ	おはせ
下二段	おはせ	おはせ	おはす	おはす	おはす	おはせ
			おはす	おはす	おはす	おはせよ

おはすは四段と下二段とに活用する動詞であるのに、從來佐行變格とされた理由を見ると、右の表に示すやうに、二種の活用形の中、圈點を施したものだけを採用した結果である。それゆゑ、今おはすが下二段活用であることを證明するには、連用形おはせの存在を示せば足りる。

連用形の用例

夜中までなんおはせし。

(枕草子)

おはせ給ひしより云々。

(うつぼ物語)

おはせたれど云々。

四段活用である證據は、未然形おはさ、連體形おはす、已然形おはせの存在を示

せば足りる。

未然形の用例 おはさずなりなん。

(源氏物語)

私の敵にてもおはさばこそ。

(源平盛衰記)

連體形の用例 やかたといふものにぞおはす。

(枕草子)

さむらひにおはす中將。

(うつぼ物語)

已然形の用例は見えないけれども、この二様の用例によつて、明かに四段活用の動詞であるといふことが出来る。また語源の上から見ても、おはすは大坐在の約言であつて、これがおはしますとなり、更におはすとなつたものである。そして

おほましますまたはおはしますは古くは四段に活用したものであるから、おはすもまた四段活用である。しかし、中古は下二段活用の優勢であつた時代で、上古の四段活用の動詞が下二段活用に變じたものも少くないから、おはすも恐らくこの時代に下二段にも活用するやうになつたのであらう。（日本文法論「おはすといふ用言のはたらきにつきての論」及び吉岡氏文語口語對照語法参考）

四八 口語動詞の命令形

口語動詞の命令形については、本書は文部省の口語法に従つて、上一段・下一段の動詞は起きよ・起きろ、受けよ・受けろのやうに、よ・ろの二つに定め、加行變格の動詞はこいの一つに定め、佐行變格の動詞はせよ・しろの二つに定めた。（口語法別記参考）

四八 口語四段活用

文語の奈行變格活用の死ぬ・往ぬは、今日では、全國とも大抵通例の四段活用にして使つてゐる。しかし、中國・四國・九州の處々には、「死ぬ

る人」、「往ぬる時」などと、まだ奈行變格活用の姿を残して使つてゐる所もあるがそれも多くは連體形の場合ばかりで、「死ぬれば」・「往ぬれば」などは、大抵は「死ねば」・「往ねば」と使つてゐる。「往ぬ」といふ動詞は、三重・愛知・岐阜・福井の各縣から東では、口語には使はない。九州でも、佐賀・熊本・鹿兒島の各縣は使はないやうである。

文語上二段活用の「恨む」は、文語でも四段活用を許容されてゐるほどであるから、口語は大抵四段活用に活用してゐる。しかし、中國・九州邊にはまだ口語に少しは上二段活用に使つてゐる處があり、また上一段活用に使つてゐる處もあり、また相混じて使つてゐる處もある。（口語法別記参考）

口語上一段活用 文語上二段活用は、口語では上一段に活用するが、九州の處處や和歌山縣の一部では、「起くる・起くれ」、「落つる・落つれ」などと活用させる。

しかし、「起く」「落つ」といふ終止形は「びてゐる。

文語四段活用の飽く・足る・借りるは、關西の口語は四段活用とし、關東では飽きる・足りる・借りると上一段活用としてゐる。隨つて、此等は口語法の説によつて兩様に活用するものとしたがよからう。(口語法別記参照)

五二 口語下一段活用

文語下一段活用は口語では大抵下一段に活用するが、これも九州の處々や和歌山縣の一部では、「受くる・受くれ」・「捨つる・捨てれ」と活用させる。

五四 口語佐行變格活用

すが他の語と結びついたものは、文語ではすべて佐行變格に活用するが、口語では本書に示したやうに一定してゐない。この點については、吉岡氏の説が最も理解し易いから、御参考までに左に引用しよう。

「與する」・「罪する」・「ハヤガキ早書する」・「ノミタヒ飲食する」のやうに、和訓の名詞の動詞に

なつたもの、「勉強する」・「議論する」・「氣絶する」・「介抱する」のやうに、二字以上の漢語の動詞になつたもの、「高くす」・「卑うす」・「空しうす」・「久しうす」のやうに、形容詞の動詞になつたもの、「明かにする」・「審かにする」のやうに、副詞が動詞になつたものなどは、いづれも佐變に活用しますし、「重んじる」・「輕んじる」・「安んじる」・「疎んじる」のやうに、形容詞の語幹に「み」の附いたものと「す」との熟合したもののが、概ね佐行上一段に活用しますが、一字の漢語は佐變に活用するもの、上一段に活用するもの、四段に活用するもの、種々雜多であります。殆どその所屬を定めるのに迷ふのであります。即ち課・解・許・窮その他多くの漢語は佐變に屬しますが、察・熟・高・焙・通・封・案・感・談・判・煎・損などは上一段に屬し、賀・謝・議・辭・解・愛・害・廢・弑・託・駁・譯・略・祝などは四段に屬しまして、殆どどういふものがどうと

いふ定りがありません。たゞ上一段に轉じるものは、語末の促るもの、延びるもの、鼻音になるものに多いといふことはいへますので、國定讀本にも、「乗船の望に應じる」と、應を上一段に用ひてあります。要するに、一字の漢語の動詞になるとついては、まだ一定した規則を作つてゐません。加之、東國地方ではかやうに三種の活用に分れます、中國・四國の處々及び九州の大部分に於きましては、なほ佐變に用ひ、または四段と佐變とを混じてるのですから、今はまだ過渡の時代にあるといつて宜しいことと考へます。

なほこの問題に關しては、「口語法別記」を參照されたい。

五九 練習

一、次の文から動詞を摘出して、その活用名を示せ。

- イ、乘じ サ行變格 出で ダ行下二段 迫り ラ行四段 踏み マ行四段
 行き カ行四段 息へ ハ行四段 吹き カ行四段 來り ラ行四段
 忘る ラ行下二段
- ロ、入り ラ行四段 生ず ザ行變格 出づれ ダ行下二段 釣る ラ行
 四段 あり ラ行變格 あぐる ガ行下二段。
- ハ、妄語す サ行變格 墮す サ行四段 煙忌し・攘斥し サ行變格 絶ち
 タ行四段 遭ふ ハ行四段 見る マ行上一段 同情せ サ行變格 至
 ら ラ行四段
- ニ、興さ サ行四段 通曉せ・代表す・涉獵し サ行變格 訪ひ ハ行四段
 造る ラ行四段 吸入す サ行變格 (井上哲次郎「國民文學の性質」)
 ホ、成る ラ行四段 従ふ ハ行四段 想ふ ハ行四段 比すれ サ行變格

あり ラ行變格 舉ぐ ガ行下二段 臨み マ行四段 得 ア行下二段
 喜び バ行四段 祝す サ行變格 (西郷従道「鐘ヶ坂隧道開通式祝辭」)
 へ、ある ラ行四段 活動すれ サ行變格 疲れる ラ行下一段 休養する
 サ行變格 なる ラ行四段 過せ サ行四段 慣れ ラ行下一段 き
 カ行變格 流れる ラ行下一段

ト、いふ ハ行四段 這入ら ラ行四段 云ひ ハ行四段 ある ラ行四段
 讚美する サ行變格 描く カ行四段 出来る カ行上一段 思ふ ハ
 行四段

チ、附着し サ行變格 立つ タ行四段 歩く カ行四段 這ふ ハ行四段
 しやがむ マ行四段 坐る ラ行四段 なる ラ行四段 跳ぶ バ行四
 段 はねる ナ行下一段 走る ラ行四段 摘む マ行四段 つまむ

マ行四段 ひねる ラ行四段 勵か 勵く カ行四段 泣く カ行四段
 笑ふ ハ行四段 ほゝゑむ マ行四段 附け カ行下一段 発する サ
 行變格 觀 マ行上一段 名づけ カ行下一段 (坪内雄藏「根氣の有無」)
 リ、旅行する・歩行し サ行變格 る ワ行上一段 あれ・あり ラ行四段
 控へ ハ行下一段 迎る ラ行四段 あら ラ行四段 直立する サ行
 變格 攀ぢ ダ行上一段 上る ラ行四段 堪へ ハ行下一段 倒れ
 ラ行下一段 起き カ行上一段 轉び バ行四段 立ち タ行四段 志
 す サ行四段 前進し・到達する サ行變格。

ヌ、俟つ タ行四段 申す サ行四段 あり ラ行四段 充實し・整備し
 サ行變格 荣え ヤ行下一段 興る ラ行四段 いふ ハ行四段 缺け
 カ行下一段 あり ラ行四段 富ます サ行四段 出來 カ行上一段 強

うする 獨立し サ行變格 保つ タ行四段 思ひ ハ行四段

二、次の文に誤があれば訂正し、且その理由を述べよ。(文語文は高等程度の各種専門學校の入學試験問題である)

イ、勤むを勤むると訂正、マ行下二段の連體形であるから。

ロ、戒め戒めを戒めよ戒めよと訂正、マ行下二段の命令形であるから。

ハ、仕ふを仕ふると訂正、ハ行下二段の連用形であるから。

考ひを考へと訂正、ハ行下二段の連用形であるから。

ニ、製すを製すると訂正、佐行變格の連體形であるから。

ホ、忘るを忘るゝと訂正、ラ行下二段の連體形であるから。

ヘ、死ぬるを死ぬと訂正、口語では四段に活用しその連體形であるから。

ト、勉強せ、勉強せを勉強せよ、勉強せよと訂正、佐行變格の命令形である

から。

チ、ちがうをちがふと訂正、ハ行四段の連體形であるから。

リ、用ふるを用ひると訂正、ハ行上一段の連體形であるから。(國定教科書に従ふ)

ヌ、受くるを受けると訂正、口語はカ行下一段に活用し、その連體形であるから。

枯るゝを枯れると訂正、口語はラ行下一段活用であるから。

六六

練習

一、次の文に誤があれば訂正し、且その理由を述べよ。(主に高等程度の各種學校入學試験問題である)

イ、老ひを老いと訂正、ヤ行上二段活用であるから。
ロ、笑うを笑ふと訂正、ハ行四段活用であるから。

行いを行ひとと訂正、元來ハ行四段活用の動詞から來たものであるから。
恥ずるを恥づると訂正、ダ行上二段活用であるから。

ハ、強ゆを強ふと訂正、ハ行上二段活用であるから。
ニ、飢へを飢ゑと訂正、ワ行下二段活用であるから。

凍へを凍えと訂正、ヤ行下二段活用であるから。
ホ、堪えを堪へと訂正、ハ行下二段活用であるから。

老ひを老いと訂正、ヤ行上二段活用であるから。
ヘ、覺へを覚えと訂正、ヤ行下二段活用であるから。

ト、飢えを飢ゑと訂正、ワ行下二段活用であるから。

あたうをあたふと訂正、ハ行下二段活用の終止形であるから。

チ、冴へを冴えと訂正、ヤ行下二段活用であるから。
聞ゑを聞えと訂正、ヤ行下二段活用であるから。

リ、報ふを報ゆと訂正、ヤ行上二段活用であるから。

ヌ、詔わを詔はと訂正、ハ行四段活用であるから。

ル、仕えるを仕へると訂正、ハ行下一段活用であるから。(口語)
ヲ、後れるを後るゝと訂正、文語ではラ行下二段活用であるから。

ワ、捉えを捉へと訂正、ハ行下一段活用であるから。(口語)
カ、据えを据ゑと訂正、ワ行下一段活用であるから。(口語)

ヨ、備えを備へと訂正、ハ行下一段活用であるから。(口語)
いえをいへと訂正、いはれが約されていへといふハ行下一段の動詞とな

つたのであるから。(口語)

二、次の空位に適當な假名を填補せよ。

イ、鍛へ 蓄へ 老い 悔ゆ

ロ、用ひる

ハ、氣遣ふ 悔ゆる

ニ、肥え 植ゑれ

ホ、冴え 感じる

六八

動詞の音便

動詞の音便は、平安朝の初期及び中期は、い音便とう音便だけで

しかも今日よりはその用法も自由であつたが、平安朝の末期頃から文學上にも促

注意

感ずは文語で、佐行變格に活用し、感じるは口語で、上一段に活用する。(口語佐行變格の部参照)

音便や撥音便が使用されるやうになつた。そしてこの四種の音便の中で、ハ行に存在するもの、即ち「言ひ」・「買ひ」などが「て」・「た」に接する場合には、愛知縣・岐阜縣・新潟縣を中心として、東部は「言つて」・「買つて」と促音便を使用し、西部は「言うて」・「買うて」とう音便を使用してゐる。國定教科書は東京語を標準としてゐるから、促音便を使用してゐるが、う音便の使用範囲も廣いから、標準語として兩立させてもよからうと思ふ。しかし、「口語法別記」では、「言うて」「買うて」のやうに發音して、語根まで變るから、此等は促音便と一定されてゐる。口語動詞の音便の中、「ござります」・「おつしやいます」などは、あまり中學校の文典には説かれてゐないが、現代では盛に使用される言葉であるから、多少は説明した方がよいと思ふ。

練習

一、次の文中にある音便の種類を説明せよ。

イ、懐うて う音便

ロ、戴いて い音便

ハ、恃んで 摺音便

ニ、光つて 促音便

ホ、群つて 促音便

ホ、響いて い音便

二、次の文に誤があれば訂正し、且その理由を述べよ。(文語文は高等程度の各種學校の入學試験問題)

イ、割ひてを割いてと訂正、「割き」はカ行四段の動詞で、「て」に連る時は「割きて」となり、音便では更にい音便を用ひて「割いて」となるから。

講ふたりを請うたりと訂正、「講ふ」はハ行四段の動詞で、「たり」に連る時は「請ひたり」となり、更にう音便を用ひて「請うたり」となるから。
ロ、負ふてを負うてと訂正、「負ふ」はハ行四段の動詞で、「て」に連る時は「負ひて」となり、更にう音便を用ひて「負うて」となるから。
攀ずるを攀づると訂正、ダ行上二段活用であるから。

ハ、教えを教へと訂正、ハ行下一段活用であるから。

就ひてを就いてと訂正、「就き」はカ行四段の動詞で、「て」に連る時は「就きて」となり、更にい音便を用ひて「就いて」となるから。

ニ、訪ふてを訪うてと訂正、「訪ふ」はハ行四段の動詞で、「て」に連る時は「訪ひて」となり、更にう音便を用ひて「訪うて」となるから。
乞うを乞ふと訂正、ハ行四段の動詞の終止形であるから。

ホ、仰ひでを仰いでと訂正、「割いて」・「就いて」などと同じ理由で、恥じを恥ぢと訂正、ダ行上一段の動詞であるから。

ヘ、思ふてを思うてと訂正、理由は「負うて」と同じ。言ふてを言うてと訂正、理由は「負うて」と同じ。

ト、おつしやるをおつしやいと訂正、口語のラ行四段の動詞が「ます」に連る時はい音便となるから。

チ、買ふてを買うてと訂正、理由は「負うて」と同じ。リ、ござひをございと訂正、理由は(ト)と同じ。

ヌ、下さるを下さいと訂正、理由は(ト)と同じ。

第八章 形容詞附形容動詞

七六

形容詞の定義 本書では、形容詞は事物の性質・状態を表し、一定の語形變化をなす單語であると定義した。單に性質・状態を表すといふだけでは、動詞の「聞く」・「眠る」なども一種の状態とも見られるところから、動詞と形容詞との區別が不明瞭である。それゆゑ、動詞と形容詞との區別を論ずるならば、特に「一定の語形變化」といふことに注目すべきであると思ふ。なほ、詳細は「日本文法論」を参照されたい。

七六

形容詞の活用 この活用については二説ある。

一、「く活用」・「しく活用」の二種に分ける説

二、右の兩説を合して「く活用」の一種とする説

本書は第一説を採用した。第二説では、「しく活用」の存在を認めないのであるから、涼し・大人し・荒々しなどを語幹とするのであるが、此等は涼風のススヤカゼ、及びオトナ

大人・荒々を語幹とするのが穩かであり、また、終止形の説明も簡単に出来るから、第一説に従つたのである。

七七 口語の形容詞　口語では、未然の意を表す形はない。また、終止形や連體形はい音便から轉じて活用形となつたものである。

七八 形容動詞　形容動詞の中、静かなり・堂々たりなどは、なり・たりを助動詞とし、静か・堂々を副詞とする説もあるが、かくては、獨立して用ひられない助動詞を副詞が修飾するといふ不合理なことになるから、本書は從來のやうに此等も形容動詞とした。

七九 形容動詞の活用語尾のなり・たりと助動詞なり・たりとの區別　形容動詞の僅かなり・洋々たりなどのなり・たりと、「正成は忠臣なり」・「彼も人たり」などのなり・たりとは、往々混同されるが、その區別は次のやうである。

指定の助動詞なり・たり(口語だ・です)の上に来る語は、必ず名詞かまたは名詞に準じて用ひられるものであるから、が・の・をなどの助詞をつけることが出来るが、形容動詞の場合には名詞のやうに自由に出来ない。これが兩者を識別する方法である。

八〇 口語形容動詞　口語の形容動詞の活用は、本書は學習上の便宜を圖つて簡単に説明したが、委しくその活用形を示すと次のやうである。

一、多かりのやうに、形容詞とありとの熟したもの

未然形　あの川には水が多からう。

連用形　水が多かりさうだ。

水が多かつた。(音便)

二、静かなりのやうに、副詞とありとの熟したもの

- 未然形 夜は静かだらう。(静かでせう)
 演用形 風も静かで波も穏かだ。(中止形)
 風も静かだつた。(静かでした)
 終止形 風も静かだ。(静かです)
 連體形 風も静かな日だ。

已然形 風が静かなればよいが。

右の外、堂々たり・洋洋たりなどに對する口語の形容動詞はない。

八〇 練習

一、次の文から形容詞・形容動詞を摘出して、その活用形を説明せよ。

- | | | | |
|--------------|----------|------|--------------|
| イ、麗しき | 形容詞 連體形 | 嬉しく | 形容詞 連用形(中止形) |
| 淡き | 形容詞 連體形 | 黒き | 形容詞 連體形 |
| ゆかし | 形容詞 終止形 | | |
| ロ、廣く 高く | 形容詞 連用形 | 面白し | 形容詞 終止形 |
| 赤く | 形容詞 連用形 | 近く | 形容詞 連用形 |
| おろかなり | 形容動詞 終止形 | 漫々たる | 形容動詞 連體形 |
| 涼しき | 形容詞 連體形 | | |
| ハ、憂しつらし すがくし | 形容詞 終止形 | | |
| ニ、僅かな | 形容動詞 連體形 | 遠く | 形容詞 連用形 |
| 低い 短い | 形容詞 連體形 | 小さい | 形容詞 連體形 |
| 奇麗な | 形容動詞 連體形 | 青い | 形容詞 連體形 |
- (島村抱月「利根川の一夜」)

薄く

形容詞 連用形 (永井荷風「逗子の海岸」)

ホ、沈々たる 疎らな

形容動詞 連體形 低い

形容詞 連體形

なく

形容詞 連用形

二、次の文に誤があれば訂正し、且その理由を述べよ。(主に高等程度の各種學校の入學試験問題である)

イ、嬉しみを嬉しうと訂正、嬉しくのう音便であるから。

浅ましを浅ましと訂正、しく活用の終止形であるから。但し許容案では許されてある。

ロ、笑ふを笑うと訂正、笑ひのう音便であるから。

あししをあしと訂正、理由は浅ましに同じい。

ハ、辱ふしを辱うしと訂正、辱くといふ形容詞が動詞すと熟合し、その間に

う音便があるから。

堪えを堪へと訂正、ハ行下二段活用であるから。

ニ、宜しみを宜しうと訂正、理由は(イ)に同じい。

御願いを御願ひと訂正、ハ行四段活用であるから。

ホ、下さひを下さいと訂正、下さりがい音便となつたのであるから。

有難ふを有難うと訂正、有難くがう音便となつたのであるから。

ござるをございと訂正、ござりがい音便となつたのであるから。

第九章 助 動 詞

八二

助動詞の中、「如し」は近頃形式用言の一種として説明する人もあるが、職掌の上から見ると、他の助動詞と殆ど同様であるから、本書では從來の説に従つて助動

詞の一種として説明した。

八五 時の助動詞 時の助動詞きの未然形にせを置く人もあるが、これはまだ大いに研究の餘地があるから、本書では省略することとした。

八七 使役の助動詞 すとさすとの區別は、音調から生じたものである。即ち四段・奈變・良變の動詞のやうに、未然形にア韻のあるもの、例へば、

行か(ア)す 死な(ア)す 居ら(ア)す

のやうなものにはすが接續し、その他の動詞、例へば、

見(ア)す 起き(ア)す

のやうに、未然形にア韻のない動詞には、ア韻のあるさすが接するのである。

八八 受身の助動詞 る・らるの區別もす・さすと同じく音調上から生じたものである。

九一

敬讓の助動詞 受身・使役の助動詞が敬讓の助動詞として用ひられるについては、「廣日本文典」に次のやうに説明してある。

貴人・尊長の動作をいふに、親しくものすといはんよりは、何事ともよくする勢力あるやうにいひ、或はよく侍者を使役して、せざする威力あるやうにいひな

せば鄭重に聞ゆるが故に、尋常の動作をも勢相または使役相にいひしより、慣用の久しき、終に敬語とはなりしなりといふ。

九四 推量の助動詞 この助動詞の中、んは、時の助動詞にも用ひられるが、その外に、

さらば・よし・自害せんと思召して……。

二見が浦は明けてこそ見め。

などのやうに、自己の意志を表す場合もある、たゞし、本書はあまり複雑になる

のを恐れてこれを略したから、そのつもりで教授して頂きたい。

九七 希望の助動詞 この助動詞は、たし・まほしの外に、なほたかりといふのがある。たかりの活用は、

未然形 花も見たからん。

連用形 花も見たかりき。

連體形 恐らく花も見たかるべし。

の三つの活用形があるが、これも本書では省略したから、注意して頂きたい。

一〇一 練習

一、次の文から助動詞を抽出して、その種類を説明せよ。

イ、ん（時または意志） なり（指定） 如く（比況） なる（指定）

べし（命令） ざら（否定） ん（時） す（否定）

（幸田露伴「受發を論ず」）

ロ、べけれ（推量） べき（推量） ん（時） ざる（否定） べし（推量）

らる（自發）
（ウォシントン會議招請文）

ハ、ね（否定） ぬ（否定） べき（推量） るれ（自發） られ（敬讓）

（桶口一葉「ほとゝぎす」）

ニ、し（時） させ（敬讓） 給ひ（敬讓） ぬ（時） たし（希望）

（幸田露伴「八郎湯」）

ホ、たる（時） ざり（否定） し（時） る（時） れ（自發）

ける（時）
（幸田露伴「うれしき」）

二、次の文から活用する語を抽出して、その語尾變化を示せ。（すべて高等程

度の各種學校の入學試験問題である)

イ、 語	種類	活用語		未然	連用	終止	連體	已然	命令
		四段活用の動詞	四段活用の動詞						
いふ	四段活用の動詞	は	ひ	ひ	ひ	ふ	ふ	へ	へ
泊り	四段活用の動詞	ら	り	り	る	る	れ	れ	れ
たる	時の助動詞	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	たれ	たれ
烈しく	形容詞	く	く	く	し	き	き	けれ	○
訪れ	下二段活用動詞	れ	れ	れ	る	る	れよ	れよ	○
咽び	四段活用の動詞	ば	び	ぶ	し	る	る	れ	○
高く	形容詞	く	く	く	き	る	る	れ	○
破れ	下二段活用の動詞	れ	れ	る	る	る	れ	れ	○
ぬ	時の助動詞	な	に	ぬ	ぬる	るる	るれ	れよ	○

(注) 口以下もこの形式で説明するがよい。

口、成し	動詞、四段	果つる	動詞、下二段	珍しく	形容詞
候ふ	動詞、四段	す	助動詞		
ハ、なく	形容詞	歩み	動詞、四段	疲れ	動詞、下二段
臥さ	動詞、四段	せ	助動詞	給ふ	助動詞
痛ましき形容詞					
ニ、伴ひ	動詞、四段	及ほす	動詞、四段	大なり	形容動詞
ホ、堅から	形容動詞				
心得	動詞、下二段	成す	動詞、四段	べし	助動詞
ハ、磨か	動詞、四段	す	助動詞	添は	動詞、四段
ざら	助動詞	ん	助動詞		

ト、同じから形容動詞

さる

助動詞

ある

動詞、ラ變

よれ 動詞、四段

る

助動詞

なる

助動詞

べし

助動詞

チ、見

動詞、上一段

警省する動詞、サ變

なかる

形容動詞

べから

助動詞

リ、明け

動詞、下二段

す

助動詞

ん

助動詞

ヌ、遊び

動詞、四段

後れ

動詞、下二段

じ

助動詞

悔ゆ

動詞、上二段

暮さ

動詞、四段

老い

動詞、上二段

なかり

形容動詞

口語の時の助動詞

文語のんに對して、口語ではう・ようの二つがあるが、

この二つの區別は音調の上に存するだけである。即ち、

行かう 死なう 居らう

などのやうなのは、いづれもオと發音するが、四段活用以外にはオ韻がないからオ韻のあるようを使用するのである。

一〇五

口語の使役の助動詞 文語のしむに對する口語の助動詞はない。たゞし、

時文語が口語の中に混することがある。

せる・させるの區別も、う・ようと同じく、音調の上に存するだけである。

一〇六 口語の受身の助動詞 れる・られるの區別も、音調の上に存するだけであるまた、自發の助動詞もあるが、本書には略しておいた。

一〇九

口語の否定の助動詞 形容詞のないと助動詞のないとの區別をよく理解させて頂きたい。形容詞の場合には、本が無いのやうに、ないが述語の地位にあるが助動詞のないは、誰もゐないのやうに、叙述を補助するに過ぎないのである。

口語の推量の助動詞 この助動詞は、本書に示した外に、
悪い病氣がはやるさうだ。

非常に賑やかな土地ださうです。

のやうに、さうだ・さうですといふのもあるが、複雑になるから、本書では省略した。たゞし、この活用形は比況のやうだと同様である。

口語の比況の助動詞 本書に示した「雨が止むやうなら」、「海が荒れてゐるやうだ」などは、全く推量の意を示すものである、即ちやうだといふ助動詞は推量と比況との兩様に用ひられるものであるが、本書では、學習の便宜上から、この區別を立てなかつたから、そのつもりで初學者を導いて頂きたい。

一一五 練習

次の文から助動詞を摘出して、その種類を説明せよ。

- 一、たる（指定文語） やうな（比況） なかつ（否定） た（時）
やうに（比況） られ（受身）
（姉崎正治「戦後の社會改造」）
 - 二、た（時） られ（可能） ない（否定）
 - 三、ます（敬讓） まい（否定） まし（敬讓） たら（時）
ませ（敬讓） 申し（敬讓）
 - 四、ない（否定） だ（指定） まい（否定） れる（可能）
 - 五、ませ（敬讓） ん（否定） です（指定） ます（敬讓）
なかつ（否定） た（時）
（小川未明「平野に題す」）
- 〔注意〕** (四)の「その意味で」(五)の「考へるばかりで」のでは、「これは櫻であれば梅だ」といふ場合のでと同様であるから、指定の

助動詞の中止形と説明する人もあるが、文語の場合には、凡てにてとなるものであるから、まづ現代文では助詞としてこれとても便宜的の方法に過ぎない。説明した方が便宜であらう。

第十章 助 詞

助詞は種々に分類して説明する人もあるが、本書では三種に分類した。しかし、これとても便宜的の方法に過ぎない。

一一一 練 習

次の文から助詞を摘出せよ。

一、は の と て が に を や し て も (高山樗牛「平重盛論」)
二、の か ら に ま で は を て が と も へ で や

下 卷

品 詞

第一章 動詞の性質上の分類

一 自動詞と他動詞 西洋文法でいふ他動詞は必ず動詞の目的語を要し、且アクチブ・パッシブの一様の文を作り得る性質を有するものであるが、我が國語の他動詞には、この性質を有するものと、さうでないものとがある。例へば、「野獸は獵師に射殺されたり」、「羊、狼に食はる」などは受身の文を作り得るが、「金剛石は地中より掘らる」、「あの家はわが友人に作られた」などは他動詞で、しかも受身の文を構成しないもの、即ち我が國語ではかやうな表彰法は通常使用されない。また、

西洋の自動詞は全く受身の文を構成しないが、我が國語の自動詞は受身の文を作ることがある。例へば、「妻に死なる」「子に泣かる」などは自動詞で、しかも受身の文を構成するものである。

以上述べた區別は、我が動詞の自他を論ずる場合に特に必要なことであるから、この點に注意して教授して頂きたい。

五

練習

一、次の文から自動詞・他動詞を抽出せよ。(大正十一年度高等學校入學試験問題)

- | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|
| 産す | (他) | 抱く | (他) | 埋了す | (自) | あり | (自) |
| 目す | (他) | | | 失敗す | (自) | す | (他) |
| 解す | (他) | | | | | もつ | (他) |

二、次の動詞を性質上から分類して、何活用に屬するかを説明せよ。

- | | |
|-----|-------------------------|
| 閉づ | 自動詞はダ行上二段活用、他動詞も同活用 |
| 伸ぶ | 自動詞はベ行上二段活用、他動詞はバ行下二段活用 |
| 伸ばす | 他動詞サ行四段活用 |
| 懸る | 自動詞ラ行四段活用 |
| 数ふ | 他動詞ハ行下二段活用 |
| なる | 自動詞ラ行四段活用 |
| 走る | 自動詞ラ行四段活用 |
| 絶やす | 他動詞サ行四段活用 |
| 居り | 自動詞ラ行變格活用 |
| 燃やす | 他動詞サ行四段活用 |
| 盡く | 自動詞カ行上二段活用 |
| 照る | 自動詞ラ行四段活用 |
| 盡す | 他動詞サ行四段活用 |

第二章 敬謹の動詞

敬讓の動詞については、あまり必要を認めないから、極めて簡単に説明したが、詳細は吉岡氏の「對照語法」、岡田氏の「實用日本文典」などを参照されたい。

練習

次の文から敬謙の動詞を抽出せよ。

- 一、御覽じ
侍る のたまは たまはり

二、おはし 申し みそなはす 思しめす

三、拜辭する 仰せ 承る

四、拜誦する 拜聽する

八、伺ひ

二、いたす

第三章 文語助動詞の用法

一〇 時の表し方 文法上の「時」は勿論過去・現在・未來の三つであるが、その表し方によつて、通常態・存在態・進行態・完了態と分れる。今この態を表に示すと次のやうになる。

過 去 時	現 在 時	時 態
ナ き り	動詞そのまゝ	通 常 態
たりき・たりけり	たり	存在・進行態
たりき・たりけり	り	
た り き ・ て け り	た つ た ・ ・ り	完 了 態
た り き ・ て け り	り ・ ・ ぬ	

未	來	時	ん
ら	ん	な	ん

一〇 「つ」と「ぬ」の區別 この區別にもいろいろの説があるが、吉岡氏の説が最も穩かであるから、参考のため左の掲げよう。

「とぬ」の區別につきまして、古來種々の説がありますが、ぬは自動詞を受け、つは他動詞を受けるといふ説が最も勢力を得て居ります。しかし、これも一概には申せませんので、實例に當つて見ますと、その例外も少くありません。元來つといふ音は鋭くて強くて、殊更にするやうな意味があり、ぬといふ音は緩くて弱くて、自然になるやうな意味がありますが、他動・自動にも大凡これに似た區別がありますので、他動には自然につが多く附き自動には自然にぬが多いと思ふのであります。例へば、

くつこのであります。しかし、他動・自動は動詞固有の性質で、自由にこれを動かすことが出来ませんから、これによつて別けますと、自然多くの例外も出て参ります。それで、必ずやその言ひ方によつて區別しなければなりません。即ち話す人が事實を主觀的に直寫するやうな強い表彰法にはつを用ひ、客觀的に説明するやうな弱い表彰法にはぬを用ひると、かういへば、大抵は外れはあるまいと思ふのであります。例へば、

かの方にはや漕ぎよせよ時鳥、道に鳴きつと人に語らん。

山里に知る人もがな時鳥、鳴きぬと聞かば告げに来るがに。

「鳴く」は自動であります。かやうにつも附けばぬも附きます。しかし、前のは動作を主觀的に表し、次のは客觀的に表したのであらうと思ひます。

二六 練習

一、次の文から助動詞を摘出して、その種類及び他の單語との接續を説明せよ。
 イ、す 否定、動詞の未然形に
 まじき否定、ラ變の動詞の連體形に

なる 時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

たる 時、動詞の連用形に

る

時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

る

時、四段の動詞の已然形に

ロ、れ 受身、四段の動詞の未然形に

らる

受身、ハ行上三段の動詞の未然形に

らる

受身、サ變の動詞の未然形に

らる

受身、サ變の動詞の未然形に

らる

受身、サ變の動詞の未然形に

なれ 指定、體言に

なり

指定、體言に

なり

指定、體言に

なり

指定、體言に

なり

指定、體言に

ざる 否定、ラ變の動詞の未然形に

べし

推量、助動詞の連體形に

べし

推量、助動詞の連體形に

べし

推量、助動詞の連體形に

べし

推量、助動詞の連體形に

ハ、なる 指定、體言に

す

否定、動詞の未然形に

す

否定、動詞の未然形に

す

否定、動詞の未然形に

す

否定、動詞の未然形に

ハ、なる 指定、體言に

たる

指定、體言に

たる

指定、體言に

たる

指定、體言に

如く 比况、「の」を隔てて體言に

たる

指定、體言に

たる

指定、體言に

しめ 使役、動詞の未然形に

たり

時、助動詞の連用形に

たり

時、助動詞の連用形に

たり

時、助動詞の連用形に

たり

時、助動詞の連用形に

たり 時、動詞の連用形に
 す 否定、形容動詞の未然形に

し

時、サ變の動詞の未然形に

し

時、サ變の動詞の未然形に

し

時、サ變の動詞の未然形に

し

時、サ變の動詞の未然形に

本、ざる 否定、動詞の未然形に

す

動詞の未然形に

す

動詞の未然形に

す

動詞の未然形に

す

動詞の未然形に

しめ 使役、動詞の未然形に

し

時、助動詞の未然形に

し

時、助動詞の未然形に

し

時、助動詞の未然形に

し

時、助動詞の未然形に

しむる使役、動詞の未然形に

れ

受身、四段の動詞の未然形に

れ

受身、四段の動詞の未然形に

れ

受身、四段の動詞の未然形に

れ

受身、四段の動詞の未然形に

たれ 時、助動詞の連用形に

なり

指定、助詞に

なり

指定、助詞に

なり

指定、助詞に

なり

指定、助詞に

一、次の文に誤謬があれば、その理由を述べて訂正せよ。(凡て高等程度の各種學校の入學試験問題)

イ、衰へりを衰へたりと訂正、りは四段とサ變の動詞に接するが、衰へといふ
 下一段の動詞に接しないから、同意義を示すたりと訂正する。

ロ、關係せを關係すと訂正、まじはサ變の動詞にはその終止形に接するから。

ハ、下されを下さると訂正、まじは四段の動詞の終止形に接するから。

ニ、入場さるを入場せらると訂正、入場すといふサ變の動詞にらるが接したものであるから。たゞし、許容案では許されてある。

ホ、恨まんの恨まは上二段の動詞であるから、恨みんと訂正すべきであるが許容案では四段に活用させることも許されてある。

ヘ、出張されを出張せられと訂正、理由は(ニ)に同じい。

なりしをなりきと訂正、文の終止であるから。たゞし許容案はしを終止とすることを許してある。

ト、及ほせしを及ほししと訂正、四段の動詞からしに接するには、その連用

形からすべきであるから。たゞし、許容案では許されてある。

勉強ししを勉強せしと訂正、サ變の動詞からしに接するにはその未然形からするから。

チ、誓ふてを誓うてと訂正、誓ひてのう音便であるから。

報ひるべしを報ゆべしと訂正、ヤ行上二段の動詞はべしには終止形で接するから。

リ、癒へを癒えと訂正、ヤ行下二段の動詞だから。

失せりを失せたりと訂正、理由は(イ)に同じい。

ヌ、申せしかを申ししかと訂正、理由は(ト)に同じい。

第四章 口語助動詞の用法

二九 口語助動詞と用言の接續 これも極めて重要なことであるから、口語の用法と連絡をとつて反復練習させて頂きたい。

口語助動詞の中で、てをる・てゐる・てあるなどは、これを一つの助動詞と見る說もあるが、現代の狀態では、過渡の時代にあるので、十分説明しにくい點もあるから、本書ではいづれも一つの單語と見た。

三一 形容詞の「ない」と助動詞の「ない」との區別 この二種の「ない」はよく混同されるが、形容詞の場合の「ない」は、「金がない」のやうに、主語に對して叙述するものであるが、助動詞の「ない」は、「この着物はよくない」、「誰もゐない」などのやうに、必ず叙述する語を補助するに過ぎないものである。

三三 練習

一、次の文から助動詞を摘出して、その種類及び他の單語との接續を説明せよ。

イ、る 時、四段の動詞の已然形に やうに 比况、助詞のを隔てて體言に
やうな 比况、助動のを隔てて體言に た 時、動詞の連用形に
れ 受身、四段の動詞の未然形に ぬ 否定、動詞の未然形に
やうだ 比况、動詞の連體形に

ロ、まい 否定、四段の動詞の終止形に た 時、動詞の連用形に

ない 否定、動詞の未然形に れ 自發の助動詞、四段の動詞の未然形に

二、次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。

イ、なかろうをなからうと訂正、うは推量の助動詞である。そしてなかろといふ語はない。これはなかりといふ形容動詞がうに接する場合にかう發

音されるので、うに接するには未然形から続けるからならうとする。
口、しましやうをしませうと訂正、ましやうといふ語はない。これはうが
ますといふ語の未然形に接してかう發音されるのであるから。

ハ、述べやうを述べようと訂正、やうは様の假名である。こゝは助動詞よう
が下一段活用の述べに接するものであるから。

ニ、いるをゐると訂正、居るの未然形にうの接する場合であるから。
ホ、おろうをわらうと訂正、居るの未然形にうの接する場合であるから。
いないをゐないと訂正、理由は二に同じい。

第五章 文語助詞の用法

助詞の數は極めて多く、その用法も複雑であるが、吾人は常にこれを使用してあ
まり誤を生ずることもないから、本書ではたゞ誤解を生じやすいものだけを説明
することとした。

三五
條件の助詞 文語の場合には、上に假定の條件を表すものがあれば、述語はこ
れに應じて假定の語で結び、上に確定の條件を表す語があれば、下は確定の語で
結ぶのが本則であるが、また、次のやうな例外もある。

一、 果して 然らば、一大事なり。

二、 今日月曜日ならば、明日は火曜日なり。

二、 山高ければ、登ること能はざるべし。

今日は晴天なれば、野球試合を行はん。

右の中、(一)は、假定を確定の語で結び、(二)は、確定を假定の語で結んだもの
である。(上野・井上共著「文語法と口語法」参照)

三九 練習

次の文に誤謬があれば、その理由を述べて訂正せよ。（主に直轄學校入學試験問題）

- 一、悔のれどもを悔のともと訂正、假定の條件を示すのであるから。
- 二、候へばを候はばと訂正、假定の條件を示すのであるから。

下されまじくを下さるまじくと訂正、まじは終止形に連續するから。

三、老ひたりを老いたりと訂正、ヤ行上二段活用の動詞であるから。

臨めばを臨まばと訂正、假定の條件を示すのであるから。

四、似ればを似ばと訂正、假定の條件を示すのであるから。

五、降ればを降らばと訂正、假定の條件を示すのであるから。

六、あれどもをあればと訂正、上下の文が相應じないから。

七、誤はない。假定の條件を確定の語で結んであるが、此等は例外である。

八、欲すればを欲せばと訂正、假定の條件を示すのであるから。

九、悪しともを悪しくともと訂正、ともは形容詞の連用形に接するから。

一〇、批評せらるゝともを批評せらるるともと訂正、ともは動詞・助動詞の終止形に接するから。たゞし、許容案には許されてある。

四七 練習

次の文の誤を訂正し、且その理由を述べよ。

- 一、過するなを過すなと訂正、なは終止形に接するから。
- 二、いふやをいふかと訂正、上に疑問の語があるから。たゞし、許容案には許されてある。
- 三、あらんをあらめと訂正、こその結であるから。

- 四、せらるをせらるとと訂正、なんの結であるから。
- 五、誰なりやを誰なるかと訂正、理由は二に同じい。
- 六、べしをべきと訂正、やの結であるから。
- 七、なりけんをなりけめと訂正、こその結であるから。
- 思はるゝを思はると訂正、單に文の終止となつてゐるのであるから。
- 八、べしをべきと訂正、かの結であるから。
- 九、企つを企つると訂正、連體形であるから。
- 堪えを堪へと訂正、ハ行下一段の動詞であるから。
- 立ちけめを立ちけんと訂正、こその結ではないから。
- 覺ゆを覺ゆれと訂正、こその結であるから。
- 一〇、受けるを受くると訂正、文語であるから。

五四

練習

一、次の文の誤を訂正し、且その理由を述べよ。(凡て直轄學校入學試験問題)

だに・すら・さへの區別 本書には、だに・すらは同じものとして説明したが、また、この二語を區別して、「だには、その擧げた點を主として他を顧みないものである」とする説もある。しかし、多くの場合には混同されるから、特に區別を立てないこととした。

イ、さへをだにと訂正、或事物を擧げて他を類推させるのであるから。

空しふを空しうと訂正、空しくの音便であるから。

ロ、帽子のを帽子とのと訂正、とを略すると紛れ易いから。

ハ、文法上からいへば、水素をを水素とをとすべきであるが、紛れる恐はないから、許容案にはとを略することを許されてある。

ニ、南に・西にのにをへと訂正、單に方角を示すのであるから。

禽獸のを禽獸とのとすべきであるが、紛れることはないから差支ない。

別るゝを別ると訂正、とは言葉を言ひきる形に接するから。

ニ、次の文の意義の異同を説明せよ。

イ、太郎が次郎とともに三郎を訪ふ。(太郎が主である)

ロ、太郎と次郎とが三郎を訪ふ。(太郎と次郎とは對立する)

ハ、太郎が次郎と三郎との二人を訪ふ。

第六章 口語助詞の用法

この用法も、文語と對照して説明すれば、却つて理解しやすい。

六二 練習

一、文語のはは、活用する語の未然形に接して假定の條件を表し、已然形にして確定の條件を表すが、口語では、「雨が降るならば、來ないだらう」のやうな例外の外は、すべて已然形に接して假定と確定との條件を表す。

二、文語では、ぞ・なん・や・かのある時には、連體形で文を結び、こそある時には已然形で文を結ぶべきであるが、口語では、ぞ・か・こそなどは

用ひられるが、文の結には關係を及ぼさない。また、や・なんは文語特有のものである。

- 三、禁止のなは、文語では、良變の動詞には連體形に結びつくが、これ以外の動詞にはその終止形に結びつく。口語では、良變がないから、凡ての動詞の終止形に結びつく。
- 四、文語のさへは、あるが上になほ添ひ加はる意を表す。口語では、文語と同じ用法にあることもあるが、多くは文語のだに・すらの意に用ひられる。

第七章 紛れ易い品詞 練習

次の文の傍線を施した部分を説明せよ。(凡て直轄學校入學試験問題)

- 一、守らぬことのぬ 否定の助動詞ずの連體形
なりねべし・出で行きぬのぬ 時の助動詞ぬの終止形
- 二、積りにければのに 時の助動詞ぬの連用形
その他のに すべて助動
- 三、イ、咏歎の助動詞 ロ、指定の助動詞 ハ、動詞
- 四、イ、死にし 外には動詞。しは時の助動詞きの連體形
ロ、消えにしのに 時の助動詞ぬの連用形、しはイと同じ
- 五、イ、受身の助動詞 ロ、敬讓の助動詞 ハ、可能の助動詞
- 六、イ、指定の助動詞たりの連用形
ロ、時の助動詞たりの連體形

七、イ、敬讓の助動詞 ロ、受身の助動詞 ハ、受身の助動詞
 ニ、可能の助動詞 ホ、自發の助動詞
 八、イ、二つの單語で、な 時の助動詞ぬの未然形 ん 未來の時の助動詞 即ちなん
 は未來時の完了態

ロ、願望の助詞 ハ、係結の助詞

九、イ、感謝の助詞 ロ、反語の助詞 ハ、疑問の助詞

一〇、イ、條件の助詞 ロ、願望の助詞

一一、イ、言葉を言ひきる助詞 ロ、とて條件の助詞 ハ、事物を並列する助詞

一二、イ、時の助動詞きの連用形 ロ、意味を強める助詞

一三、イ、願望の助詞 ロ、二つの單語で、ば 條件の助詞 や 疑問の助詞

一四、イ、二つの單語で、し 時の助動詞 が 條件の助詞

ロ、し 時の助動詞 がな 願望の助詞

一五、イ、時の助動詞の已然形、即ちこその結

ロ、確定の條件を表すばに接する時の動詞の已然形

ハ、二つの單語で、し 時の助動詞 が 疑問の助詞

一六、イ、感謝の助詞 ロ、「な……そ」で禁示の助詞 ハ、願望の助詞

一七、イ、敬讓の助動詞 ロ、使役の助動詞

一八、イ、命令の意を表す ロ、推量の意を表す ハ、可能の意を表す

一九、イ、否定の助動詞すの已然形 ロ、時の助動詞ぬの命令形

ハ、死ぬといふ動詞の活用語尾

二〇、イ、假定の條件の助詞 ロ、確定の條件の助詞

ハ、花をの意を強める助詞

第八章 單語の構成

單語の構成や品詞の轉換は、「文語法と口語法」とに理解しやすく説明されてあるから、所々引用して説明しよう。

七五

疊語 疊語の名詞は物事の多數あることを表すが、西洋文法の複數と同一ではない。我が國語では、疊語となつても、名詞として用ひられるものもあれば、年々・折々などのやうに、副詞に轉ずるものもある。

疊語の副詞には、(一)けにくく・尙々のやうに副詞から成るもの、(二)折々・日々のやうに名詞から成るもの、(三)ますく・かへすべくのやうに動詞から成るもの、(四)はやぐ・うすぐ・とくくなどのやうに形容詞から成るものなどがある。

疊語の形容詞には、(一)ものくし・花々などのやうに名詞から成るもの、

(二)はれぐし・なれぐしなどのやうに動詞から成るもの、(三)遠々し・重々しなどのやうに形容詞から成るものなどがある。

七六
熟語 熟語についても、大野・井上兩氏は次のやうに分類してゐる。たゞし、編者の意見と相違するものは省略する。

熟語の名詞

- 一、名詞と名詞との結合 草木 花園 谷川……等
- 二、動詞の連用形と他語との結合 賣物 受取 足踏……等
- 三、形容詞の語幹と他語との結合 高山 足輕 長話……等
- 四、三語以上の結合 山櫻花 鼠入らず 青人草……等

熟語の副詞

- 一、名詞と他語との結合 誠に 是非とも もとより……等

- 二、動詞と他語との結合 極めて 試みに みだりに……等
 三、形容詞と他語との結合 いやしくも からうじて……等
 四、副詞と他語との結合 かくて たゞに……等

熟語の接續詞

- 一、動詞と他語との結合 然るに よつて 隨つて……等
 二、名詞と他語との結合 故に ところが……等
 三、代名詞と他語との結合 そこで それとも それゆゑ……等

熟語の動詞

- 一、名詞と動詞との結合 物語る 罪す 大殿籠る……等
 二、形容詞と動詞との結合 長引く 近付く 荒立つ……等
 三、副詞と動詞との結合 恋にす そよ吹く……等

熟語の形容詞

- 一、名詞との熟合 名高し 心細し……等
 二、動詞との熟合 有難し 聞苦し……等
 三、形容詞との熟合 細長し 热苦し……等

なほ、疊語・熟語に關しては、日本文法論に委しく説明してあるから、ぜひこれをも参考されたい。

七六

- 單語となれるものと、熟語たらずして單語の重ねられたる語との區別は、意義によりて識別すべく、外形上これを指定すること難し。たゞし、特種のものに點だけを擧げよう。

熟語となれるものと、熟語たらずして單語の重ねられたる語との區別は、意義によりて識別すべく、外形上これを指定すること難し。たゞし、その要

至りては、形體上これを識別し得るものあり。

第一、連濁

やまがは	さくらばな
みぐるし	心。ほそし
	な。だかし

第二、轉音

ふなうた	ひ。やみづ
ひつぱる	む。なぐるし
	か。ざぐるま
	あ。まごひ

第三、音の省略

つく(り)も(の)どころ	あ(し)ぶみ	か(み)ざし
--------------	--------	--------

上にいへる連濁・轉音及び音の省略の三種の現象は、必ずしも熟語に存すべきものにあらず。即ち、次の、

かはしも(川下)

くろくも(黒雲)

ふでたて(筆立)

あさせ(淺瀬)

の如きは、此等の中、一の現象の現れ得べきさまなど、事實上行はれざるを見ても知るべきなり。

接頭語・接尾語 これについては、一語々々の意義を説明する人もあり、また

意義の有無によつて分類して説明する人もあるが、此等は文法上全く必要がない。

たゞ本書にあるぐらゐを教へれば、中等教育としては十分であらう。

一、次の文から疊語・熟語及び接頭語・接尾語のある品詞を抽出せよ。
イ、蒼々たる 近づく 始めて 易から 渺茫たる 接し

類す 實に 少から (以上熟語)

ロ、漫歩す 絶えず 枯葉 白菊 幸に (以上熟語)

眞垣 (接頭語) 二もと・三もと (一種の接尾語)

ハ、いよく 山々 生々と (疊語)

夏休 野原 歓迎し 山際 鮮かな 町外れ 茶店 (以上熟語)

森など (接尾語)

ニ、藍色 晴れ渡る 大空 心もち 浮游し (以上熟語)

生々しい ところぐさまぐな (以上疊語)

二、次の單語の成立を説明せよ。

一軒家 名詞と名詞 先んず (先にすの音便) 副詞と動詞

輕んず (輕みすの音便) 形容詞の語幹と接尾語と動詞

鵜飼・犬死・袴着 名詞と動詞 掃溜 動詞と動詞

夜寒・嬉し涙 名詞と形容詞 稲田 名詞と名詞

深み・苦しさ 形容詞と接尾語 薄暗し 形容詞と形容詞

輕々し・はやぐ 形容詞の語幹の疊語 いざや 感動詞と助詞

蹴鞠 動詞と名詞 青人草 形容詞と名詞二つ

眞白 接頭語と形容詞の語幹 さりながら 動詞と接尾語

小山 接頭語と名詞 御教授 接頭語と名詞

うすく 形容詞の語幹の疊語 かき雲る 接頭語と名詞

すばやい 接頭語と形容詞 嬉しがる 形容詞と接尾語

男らし 名詞と接尾語 賣上高 動詞二つと形容詞

木の葉 名詞と助詞と名詞

第九章 品詞の轉換

轉來の助詞の處・間などは、助詞と見る説と接續詞と見る説との一つがあるが、此等は、口語でいへば、が・からともいふべき所で、もとより接續詞と見るべきものでない。

八八 練習

次の文を品詞に分類せよ。（すべて直轄學校入學試験問題）

いそしみ	日	名
ける。	は	助詞
	ひねもす	副
	夜	名
	は	助詞
	よもすがら	副
	學び	名
	の	助詞
	道	名
	に	助詞

二、春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ

思は	動	ば	助詞	副	思は	動
なる	助動	ぞ。	助詞	まづ	朋友	名
六、	今に	きつと	副	まづ	朋友	名
六、	今に	立派な	形動	を	を	助詞
六、	今に	方	名	求めよ	これ	動
六、	今に	に	助詞	求めよ	これ	代
七、	今朝	は	助詞	おなり	處世	名
七、	今朝	雲	名	おなり	處世	名
七、	今朝	霧	名	に	の	助詞
七、	今朝	なごり	名	なる	要訣	名
七、	今朝	なく	形	なる	要訣	名
七、	今朝	晴れ	動	で	要訣	名
七、	今朝	て	助詞	ござい	要訣	名
七、	今朝	海	名	で	要訣	名
七、	今朝	山	名	ござい	要訣	名
八、	櫻	はるぐ	見渡さ	る。	ね	助動
八、	櫻	はるぐ	見渡さ	る。	ね	助動
八、	櫻	散る	木下風	は	寒から	形動
八、	櫻	散る	木下風	は	寒から	形動
八、	櫻	散る	木下風	は	寒から	形動
八、	櫻	散る	木下風	は	寒から	形動
八、	櫻	散る	木下風	は	寒から	形動

雪	名	助詞	動	助詞	名	助詞	副	動	助詞	名	助詞	副
ぞ												
降り												
ける。												
九、櫻花	名	形	動	助詞	名	助詞	副	動	助詞	名	助詞	副
美しく	形	名	動	助詞	名	助詞	副	動	助詞	名	助詞	副
咲き	なき	風景	なり。	なり。	名	助動	名	助動	名	助詞	副	動
蝶	蝶の	軽けに	飛ぶ	様	は	絶えて	する。	する。	する。	する。	する。	する。
の	の	に	に	の	の	を	する。	する。	する。	する。	する。	する。
一〇、平家	名	助詞	動	名	助詞	動	名	助詞	動	名	助詞	副
の	の	の	に	の	の	を	する。	する。	する。	する。	する。	する。
一門	一門	廟堂	廟堂に	列し	六波羅	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
廟堂	廟堂	に	に	列し	六波羅	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
に	に	に	に	六波羅	の	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
せ	せ	る	時	の	の	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
る	る	時	東國	草萊	の	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
時	東國	草萊	の	の	の	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
東國	東國	草萊	の	の	の	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
草萊	草萊	の	間	の	の	の	榮華	四時	を	する。	する。	する。
の	の	間	に	に	に	に	榮華	四時	を	する。	する。	する。
間	に	潜め	潜め	潜め	潜め	潜め	榮華	四時	を	する。	する。	する。
潜め	潜め	る	る	る	る	る	榮華	四時	を	する。	する。	する。
る	る	これ	これ	これ	これ	これ	榮華	四時	を	する。	する。	する。
これ	これ	を	を	を	を	を	榮華	四時	を	する。	する。	する。
を	を	追ひ	追ひ	追ひ	追ひ	追ひ	榮華	四時	を	する。	する。	する。
追ひ	追ひ	落し	落し	落し	落し	落し	榮華	四時	を	する。	する。	する。
落し	落し	落し	落し	落し	落し	落し	落し	落し	落し	する。	する。	する。

助詞 名 助詞 形動 代
の 変轉 の 激甚なる そ の 曲折 助詞 形動
助詞 名 助詞 名 助詞 名 動 助詞 形動
が 國史 の 繪卷中 色彩 際立ち 助詞 形動
動 見る。 を 紹爛たる 助詞 代

文 章

第一章 文及び文の成分

九三 述語 「彼も人なり」、「聲雷の如し」の用例で、なり・如しを述語とし、人・雷の

を補語とする説もある。しかし、なり・如しは品詞編で述べたやうに、獨立して用ひられるものでない。従つて、文章編で一つの成文となる資格はない。本書は、この見解からして、人なり・雷の如しを一つの述語とした。

一〇一 修飾語 修飾語は、場合によつては、その修飾すべき語の曖昧なものがある。例へば、

この雀に似た鳥。 彼も同じく走るを好ます

右の例で、このは、雀を修飾するか、雀に似た鳥を修飾するか曖昧であり、同じくは、走るを修飾するか、好みを修飾するか曖昧である。此等は止むを得ず前後の様子によつて判断するのであるが、作文の場合には、なるべくこれを避けるがよい。

一〇六 練習

次の文を文の成分に分けよ。

修主補述
道端の木槿は馬に喰はれけり。

主 修 客 述 接 修 客 述
彼は 魏然たる 品位を 有し また 卓越せる 識見を 有せり。

修 修 修 修 修 修 修 修

三
に
かしに
翻る
赤十字旗は
倒れたる
多くの
負傷者を

招けり。
主修補述修補述

四、鶉飼は五月の中旬に始まり十月の下旬に終る。
主修客述
主修客述

五、明治天皇は維新の盛運を啓き、開國の宏謨を定め給へり。

卷之三

六、まあ	獨
あなたは	主
誰から	補
そんな	修
ことを	客
頃まえましたか	述

主修述

運動と勉強とは車の兩輪のやうです。

八、からつと晴れた油のやうに濃い藍色の空が見える。

九、戦争が終つた
平和の鐘は響いた
世界は一齊に改造の修

時代に入つた。述補

○、花を摘み 修
雪を弄ぶ 修
子供も 主
自然に對する 修
好奇心を 容
抱く。 述

花を摘み
雪を弄ふ
子供も
自然に對する好奇心を抱く

第二章 節

一〇七 本書に於ける主語節・述語節・客語節・補語節などの名稱は、今日あまり用ひられないやうであるが、この名稱の方が最も理解しやすく、またかやうに名づけるのが最も適當であると考へたから、これを用ひた。

一〇八 **述語節** 本書は、文の成分の所に、所謂文主（または總主語）といふものを立てない。従つて、「日本は人口が多い」、「象は體大なり」のやうな場合の、人口が多い體大なりなどは、いづれも述語節としたのである。

練習

次の文から節を摘出して、その種類を説明せよ。

一、一旦事あらば 修飾節

二、欲深き 修飾節 その心常に貧しく 述語節

欲なき 修飾節 その心常に富めり 述語節

三、大厦高樓の櫛比せし 修飾節

四、盲人の杖を失へるに 補語節

五、月落ち鳥啼きて 對立節

六、鵜船が下りて來るのを 客語節

七、吾人は須らく現代を超越すべしとは 主語節

第三章 文の成分の倒置及び省略

省略された成分を補ふ場合に注意すべきことは、すべて文法的見地から補ふことと、述語以外に用ひられた用言は時には主語を要しないがあることとで、修辭

學上の知識を濫用してはならない。

一一六 練習

次の文の文の成分を常の位置に改め、且その省略された語を補へ。

一、諸職人(は) 正月の顔になりけり。

二、福は内(に入れ)、鬼は外(に出よ。)

三、(彼が)天下の儀表となり、古今の龜鑑となれること(は)宜なり。

四、(兄は)かの山の紅葉こそ(美しからめ)とて、友とともに出で立つ。

五、(予は)雪(を)ふみわけて君を見んとは思ひきや。

六、月色(は)美なるかな、春色(は)美なるかな、(予は)實に乾坤の美妙を感じず。

七、あなたはどちらから(いらっしゃいましたか。)

(私は)京都からまゐりました。)

(あなたは)いつ(京都からいらつしゃいましたか。)

(私は)昨日(京都からまゐりました。)

八、(汝は)(予が)今いつたことをきつと忘れるな。

九、(諸子は)ならぶ山なき不二よりもなほいや高き父の恵をあふぎ見よ。

一〇、(予は)昨日參上致し候處、(君は)御不在にて(予は)拜顔を得ず、誠に殘念に存じ候。

第四章 文の組織上の種類

一一七

單文

思想上何回主語・述語の關係が結ばれても、文法上の形式から見て、ただ一回だけであれば、いづれも單文といふのである。この點をよくく初學者に

理解させて頂きたい。

一一〇 練習

次の文を文の組織上から説明せよ。

- | | | | |
|----------|-------------|----------------|------|
| 一、重文 | 二、單文 | 三、單文 | 四、複文 |
| 五、重文 | 六、複文の對立する重文 | 七、主語の缺けた不完全な重文 | |
| 八、不完全な單文 | 九、複文を含む複文 | 一〇、重文を含む複文 | |

(をはり)

大正十二年一月廿三日印刷

【非賣品】

大正十二年一月廿六日發行

現代日本文法教授備考

著作者 開成館編輯所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行者 株式會社 東京開成館

右代表者 渡邊良助

東京市芝區愛宕下町三丁目一番地

印刷者 渡邊常三郎

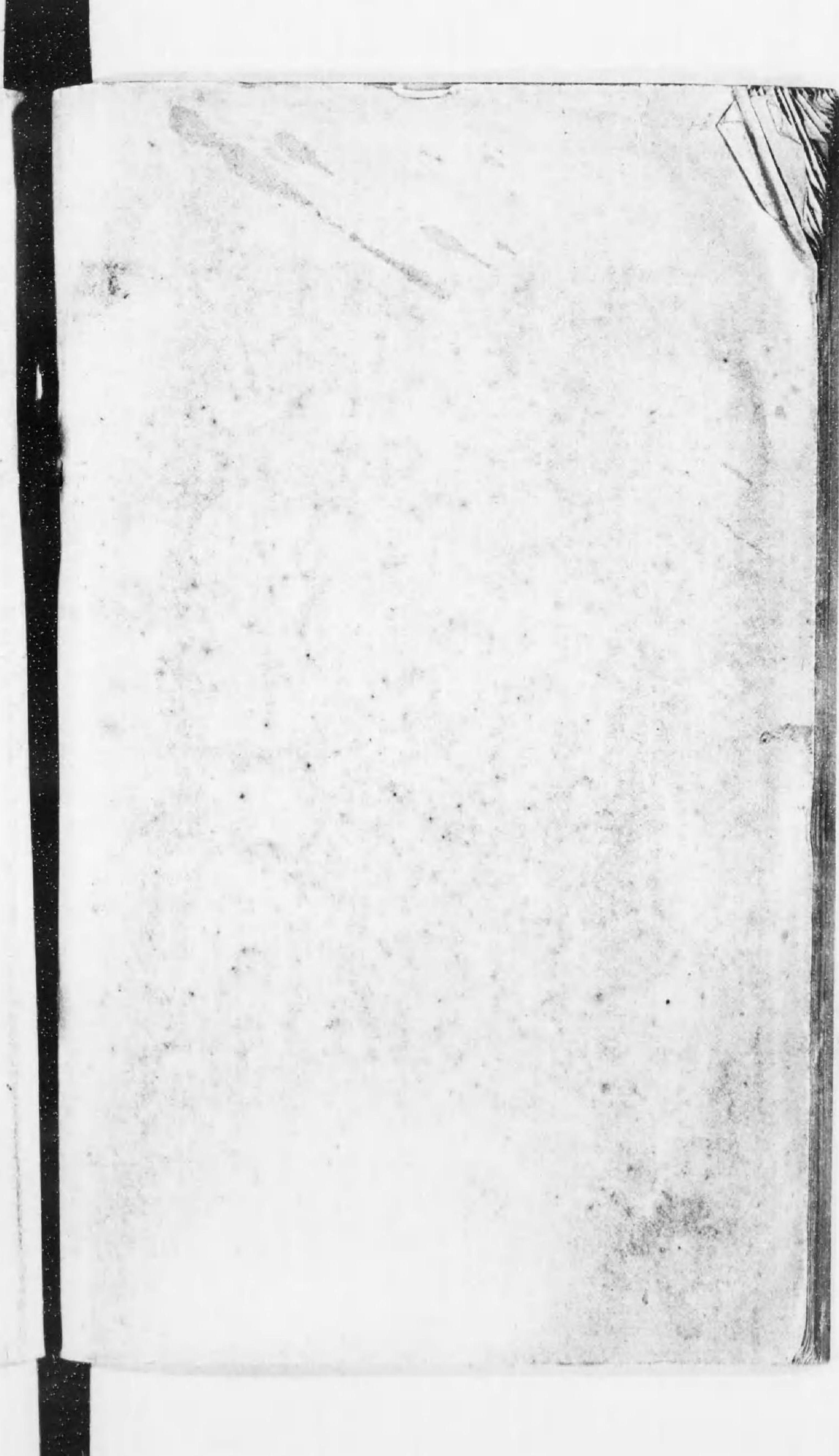
所刷印舍友愛

發行所

東京市小石川區
小日向水道町八四

株式會社

東京開成館



終

